

---

# 君に咲く花

なかゆんきなこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君に咲く花

### 【著者名】

なかゆんきなこ

### 【あらすじ】

藤堂平助は悩んでいた。ものすごく悩んでいた。

密かに（周りにはバレバレだが）想いを寄せる幼馴染、千鶴の誕生日プレゼントが決まらないのだ。

薄桜鬼、現代学園パロ設定で平助×千鶴のお話です。（つづいてはいません）

(前書き)

現代学園パロで、平助×千鶴なお話です。（付き合つてはいません）

藤堂平助は悩んでいた。

それはもう、ものづくじーべー、悩んでいた。

「……はあー」

深くため息を吐いて、自分の机の上にうつ伏せる。時はもう放課後。昨日の夜からずっと悩み続いているが、それでも答えは出ない。

「ちょっと、ため息それで何度も。正直ウザイんだけど」隣から容赦のない言葉を叩きつけるのは、級友の沖田。彼は携帯をいじりながら、平助を一瞥する。

「……だつてよー、総司……。オレ、わかんなくて」

「何が?」

平助が何に悩んでるんだか、さっぱり解らないんだけど、と沖田。

「う」

「僕はエスパーじゃないんだから、話してくれなきゃいけやんと相談に乗れないよ。ま、乗るかどうかは話の内容によるけど」

「ううー……じ、寒はな総司……」

「うと」

「もうすぐや、あいつ……の誕生日なんだ……」

「うふうふ、……って、え?」

「だから、千鶴の誕生日なんだよ。三日後」

「へえー（それは良いことを聞いたな……）」

心無しか、沖田の眼光が鋭くなつたような気がしたが、平助は気にしないことにした。

「それでさ、今年は何をやろうかなって。あいつ、何をやつても喜んでくれるんだけど……」

「ふつん。そんな毎年プレゼントあげてるんだ。さすがに幼馴染はウザ……違つね」

(今ウザイって言いかけなかつたかコイツ……)

「で、でもさ。毎年喜んでくれるから余計に、今年はもつと喜ばせたい……つて思つてさ……」

「でも何をやつたらいいかわかんないんだよー！」と叫ぶ平助。

「ちなみに、今まで何をあげてたの？」

「う、と、確か去年はCDで……一昨年は……DVD？」

どちらも一度千鶴が欲しがつていた物だ。

「でもあいつ、今年は欲しいCDもDVDももう自分で買つてしまつてるし、それに毎年似たような物贈るのも芸がないつづーか

「確かに芸が無いね」

「だろー？」でもさ、オレ……女の子が欲しがる物なんて、わからんねーし」

「本人に何が欲しいのか聞けばいいんじゃない？」

「ばつ！ そんなのこの時期に聞いちまつたら誕生日プレゼントだつてすぐバレんだろう！」

「あ、隠してくるんだ一応」

(でも平助がこれだけ拳動不審なら、さすがの千鶴ちゃんも気付くんじやないかなー)

平助の幼馴染は結構鈍い。特に自分に寄せられている感情には気が付いていないようだ。

「なあ総司。おまえつて結構女子にモテるだろ？ なんかさ、こいつイイ感じに女の子が喜びそうな物とか知らないか？」

頼む！ 教えてくれ！ と手を合わせて頭を下げる平助に、

「……、…………！ ……うん。いいよ」

しばらく考え込んだ後、沖田は頷いた。

珍しく、満面の笑みを浮かべて。

その日の放課後、平助は沖田に教えてもらったショッピングの前で人立ち竦んでいた。

(う…、なんだよココ…。すっげー入り口…)

それは、いわゆる女の子御用達のファンシーショップ。  
なんでもこの店で売っている『チョコラッチコ』とかいうキャラクターのグッズが、女子高生の間で流行っているのだそうだ。  
(結界でも張つてあんのかつづー感じだよな。男なんて一人もいねーじゃん…)

ウインドウ越しに店内を覗き見ても、中には女、女、女、女ばかり。男性客の姿は無い。

平助とて千鶴のプレゼントを選ぶのでなければ、一生足を踏み入れることも無かつた場所だらう。

(で、でも…、あいつのためだし…)

平助はプレゼントを受け取つて「ありがとう、平助君」と微笑んでくれる千鶴のことを思い浮かべ、奮起して店内に足を踏み入れた。

「うわ…」

入つてみると、予想以上の世界が目の前に広がつていた。  
所狭しと並べられている可愛いグッズ達。平助には使い道の想像もつかないそれらは、得体の知れない威圧感を醸し出している。

(つーかオレ、『チョコラッチコ』ってどんなキャラクターか知らねーし…)

うつかりしていた。

沖田はこの店にくればすぐ解るよ、などと言つていたが、色々なキャラクター物がありすぎてどれがどれやら解らない。

それに…、

「…ねえ、あれ男の子じゃない?」

「可愛いー。彼女へのプレゼント選んでるのかな?」

「案外自分の趣味なのかもよ」

「ヤダー」

周りの女性客の視線と好奇心が、痛かつた。

(は、早く買つて出よう！ 早く！)

平助は勇気を振り絞り、同じく自分に視線を向けている女性店員の所に向つた。

「あ、あの！」

「はい。何かお探しですか？」

「あ、あの…チヨ、」

「ちょ？」

「『チヨ ロラッチュ』のグッズつて、どこにありますか！」

「……」

店員が、困ったように黙り込む。

次の瞬間、平助と店員のやりとりを聞いていた女性客の一人が吹き出し、

それを皮切りに、

店内が、爆笑の渦に包まれた。

「チヨ、チヨ ロラッチュつて…（笑）」

「ヤダーもう可愛いー！」

「何かの罰ゲームなんぢゃないの一？」

「え？ エエ？」

うろたえる平助に、

「お、お客様。申し訳ありませんが、」

女性店員が、笑いを堪えながら教えてくれた。

「そのような可愛らしいお名前のキャラクターは、いませんよ？」

「…………っ！ そ、総司いいい！」

平助は林檎のように真つ赤になつた顔で、元凶の沖田の名を叫びながらファンシー・ショップから逃亡した。

女性店員並びに女性客達は、それを暖かな目で見送つたといづ。

「ふひやひやひやひやつ！ やつてくれるなー総司のヤロー！」

「ちょっと一笑い事じやねーよ新ハツつあん！ オレ総司のせい

でえらい恥かいたんだぞ！」

次の日の放課後。

平助は体育教官室で永倉と原田相手に、昨日の顛末を語っていた。「にしても、短時間でまたタチの悪い悪戯を考え付くもんだな」永倉のように爆笑することこそ無かつたが、原田は沖田の容赦ない嫌がらせに逆に感心している。

「感心するなよ左之さん！」

「悪い悪い。でも、総司だつて謝つたんだろ？」

「……すーげえ棒読みだったけど」

そう、棒読みで「『めん』めん平助。間違えちゃった」と言つただけだ。

「ぜつてえ確信犯だろ！」

「ぶははははっ！ いやあ、俺も見たかったなあ。平助が『チョコラッチュ』つて叫ぶとこ」

「新八つつかん！ 笑い事じゃねーつての！」

「まあまあ一人とも落ち着けよ。で？ 平助。俺らン所に来たのは馬鹿話をするためだけじゃないんだろ？」

原田に宥められ、藤堂がう…と言葉に詰まる。

まだまだ沖田は腹立たしいし笑い続ける永倉も恨めしいが、今はそれどころではない。猶予はあと一日しかないのだ。

「う…。そ、それでさ…、もう総司は頼れねーし、一人の意見も聞いたことかなつて、思つて…」

要するに、今度はこの二人にアドバイスを求めているのだ。

永倉の方はあまり当てにしていないが、原田はけつこうモテるし、女の扱いが上手い。何か参考になるアドバイスを貰えるのではないが、そう思つて平助は放課後、一人がよく溜まつている体育教官室に顔を出した。

「新八つつかんや左之さんなら、どんな物を贈る？」

教え子に問われ、二人はそろつてうーんと考え込む。

「あ！ 欲しいもんがわからんねーなら、いつそ現金とか金券にしち

まうつついのはどうだ？ 絶対外さないだろー」「レなり

いつも金に困っている永倉が自信満々でそう言いつと、

「馬鹿外しまくりだよ」

「新八つesan最低ー」

原田と平助二人に速攻で否定された。可愛げが無いプレゼントにも程がある。

「じゃ、じゃあ左之はどうなんだよー。」

「そう…だな。…花、とか」

「は、花あ？」

そう。ミニブーケや、ちょっと頑張って大きめの花束を贈る。花を喜ばない女の子はそういうのないだろう。だが、

「うう…、花かあ…なんかキザっぽくて…」「うーん…」

平助にはまだまだ敷居が高いようだ。

「ま、一番良いのは本人の好きな物を贈ることだな」「好きな物？」

「そ。まあ相手の趣味に合わせるつてこった。例えば、確かに可愛いキャラ物を好きな女の子が多いが、千鶴はそういうのを持つてのか？」

「あ…、そういえば…」

千鶴がその手の物を持つていたり、身につけていたり見えた事が無い。

「ところことは、そういうのは千鶴の趣味とは違うんだろ？ で、逆に日頃どうこうのを身につけてる？」

「えーと…、わりと地味つづーか、シンプル？ …あ、結構和風っぽいのが多いかも！」

「でかした、それだ。そういうのを扱ってる店、教えてやるからよ。じっくり選んで来いよ」

彼女のことを想いながら、と微笑う原田に『大人の余裕』的な物を感じ、平助は、

(…左之さんつて『大人の男』って感じだよな。最初から左之さ

んに相談すれば良かつた）

と、最初に沖田に相談してしまつたことを深く深く後悔するの  
だった。

原田に教えられた店は、想像していたよりも「じんまりとしていた。

それでも落ち着いた内装と静かな店内は、慣れないせいでも少しの居心地の悪さを感じても、そう悪いものではなかつた。

（一口に和風って言つても、色々あるんだなー）

平助はきょろきょろと興味深く、店内を見渡す。

中には茶器や茶葉など、茶に関する道具を置いてあるスペースもある。

（あいつ日本茶が好きだしな…茶碗つてのもアリか？）

そう思つて近付いてみると、何となく、渋くて地味なものばかりかと思つていたが、中には白地に薄いピンクで桜の花弁を散らせた可愛らしいデザインの物もあつた。

（でも、あいつもう自分の茶碗持つてるし…）

ちなみに、千鶴と薰とついでに平助の茶碗は色違いのお揃いの柄だ。数年前、千鶴が日本茶に凝りだしたときに、よく一緒にお茶を飲むからと兄と幼馴染の分までお揃いで茶碗を買ったのだ。

（お茶つ葉は…あいつの方が詳しいし。オレよくわかんねーし）

それにもし、自分の選んだ茶葉が千鶴の好みに合わなかつたら、なんか嫌だし申し訳ない。

（ううーん…、これはこれで結構悩むなあ…）

悩みながら、平助は店内をゆっくり歩き回る。

そして色々な物を一つ一つ手に取り、あれでもないこれでもないと、選ぶ。

きっと喜んでくれるだろう千鶴の、笑顔を思い浮かべながら。

「…千鶴、今いいか？」

コンコンと、ドアをノックする音。

そして聞きたなれた幼馴染の声に、千鶴は読んでいた本を閉じ、ドアを開ける。

「どうしたの？ 平助君」

今日のようになり、お互の家の夕食が終わってから平助が遊びに来るのはよくあることだ。

しかし、今日はいつもと少し様子が違う。

「いや、違くて、その…」

「え？」

突然小さな紙袋を手渡され、千鶴はきょとんとする。

「今日、おまえの誕生日だる。それ、プレゼントだから」

「え。あ、ありがとう！」 平助君

開けて良い？ と問われ、平助は「お、おつ」と頷く。何だか無性に照れくさかった。

「き、気に入らなかつたら…」「めんな…」

店のロゴの入った紙袋の中に、綺麗にリッピングされた包みが一つ。

その包みを丁寧に丁寧に開けてこくと、由に箱が一つあつて。

「…わあ…」

「その、お、おまえに似合つと思つて…」

中には、小さな桜の花と蝶の飾りがついた簪が一つ、入っていた。「か、簪つて、着物とかじやなくとも合つて、店員さんが言つて。おまえ、髪長いし、絶対、似合つかい」「すじく可愛い…」

千鶴はさつそく、緩く纏めてあつた髪を解き、わっとおだんだりに纏め直して簪を挿した。

黒髪に、薄いピンクの桜と赤い蝶が良く映える。

「…」「似合つかな？」

少し恥ずかしさつに尋ねる幼馴染の少女があまりに可愛くて、

「！　お、おう！　も、ぱっちし！　すっげー似合つてる！」

顔を真っ赤にしながら、何度も何度も頷く」としかできなかつた。

「ありがとう、平助君。大事にするね」

「…へへ。今度は、それつけて出かけよーザ。一緒に

「うん！」

そうだ、この簪を貰つたあの店にて、千鶴を連れて行こう。  
きっと喜ぶだらうと、平助は田の前で嬉しそうに笑う千鶴を見つ  
めながら、そう思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5880u/>

---

君に咲く花

2011年9月1日04時57分発行